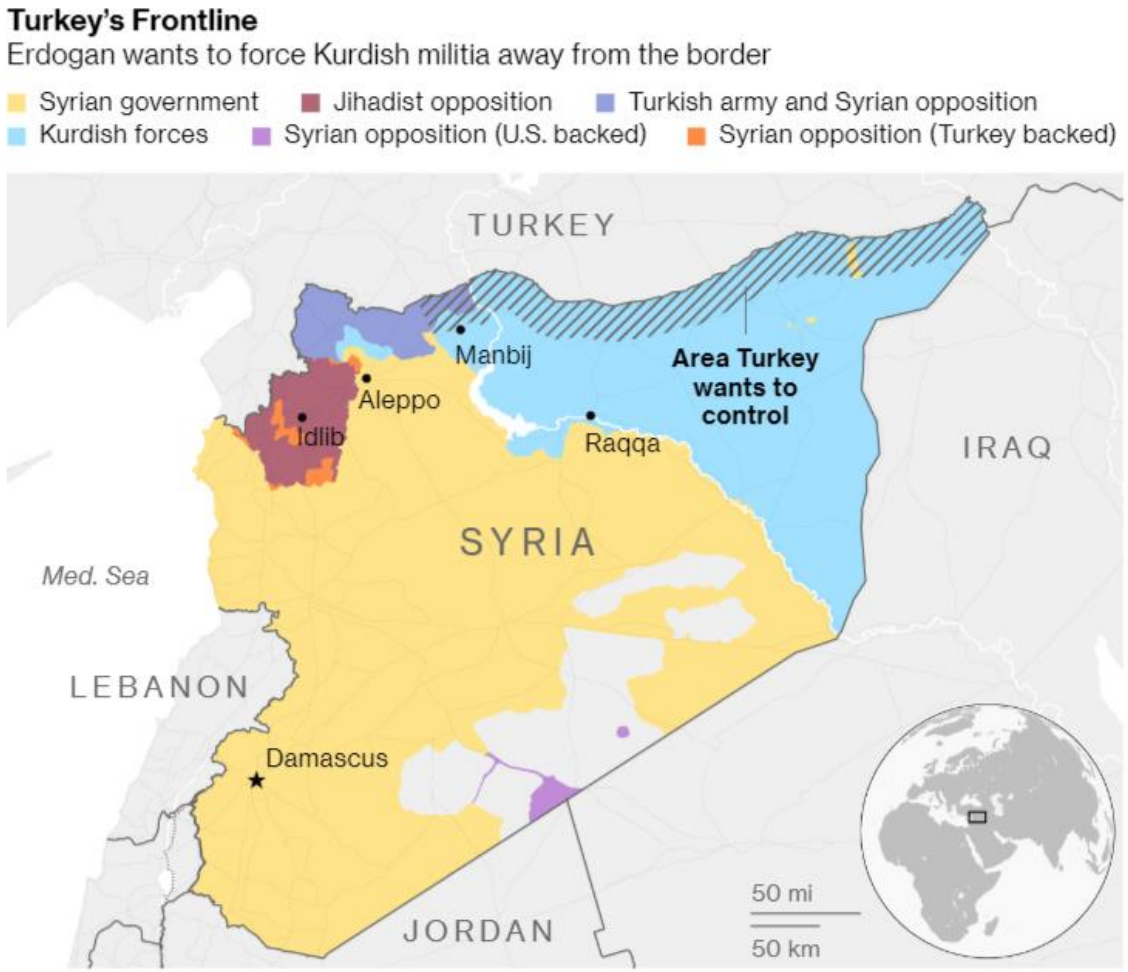
アメリカの中東離れから見える世界

第１回

「激動の世界情勢を聖書から読み解く」勉強会

トルコ、シリア北東部国境越え、侵攻（ユーフラテス川以東のクルド人勢力）



Sources: Conflict Monitor by IHS Markit, areas of control as of Sept. 30, 2019; Office of the Turkish President

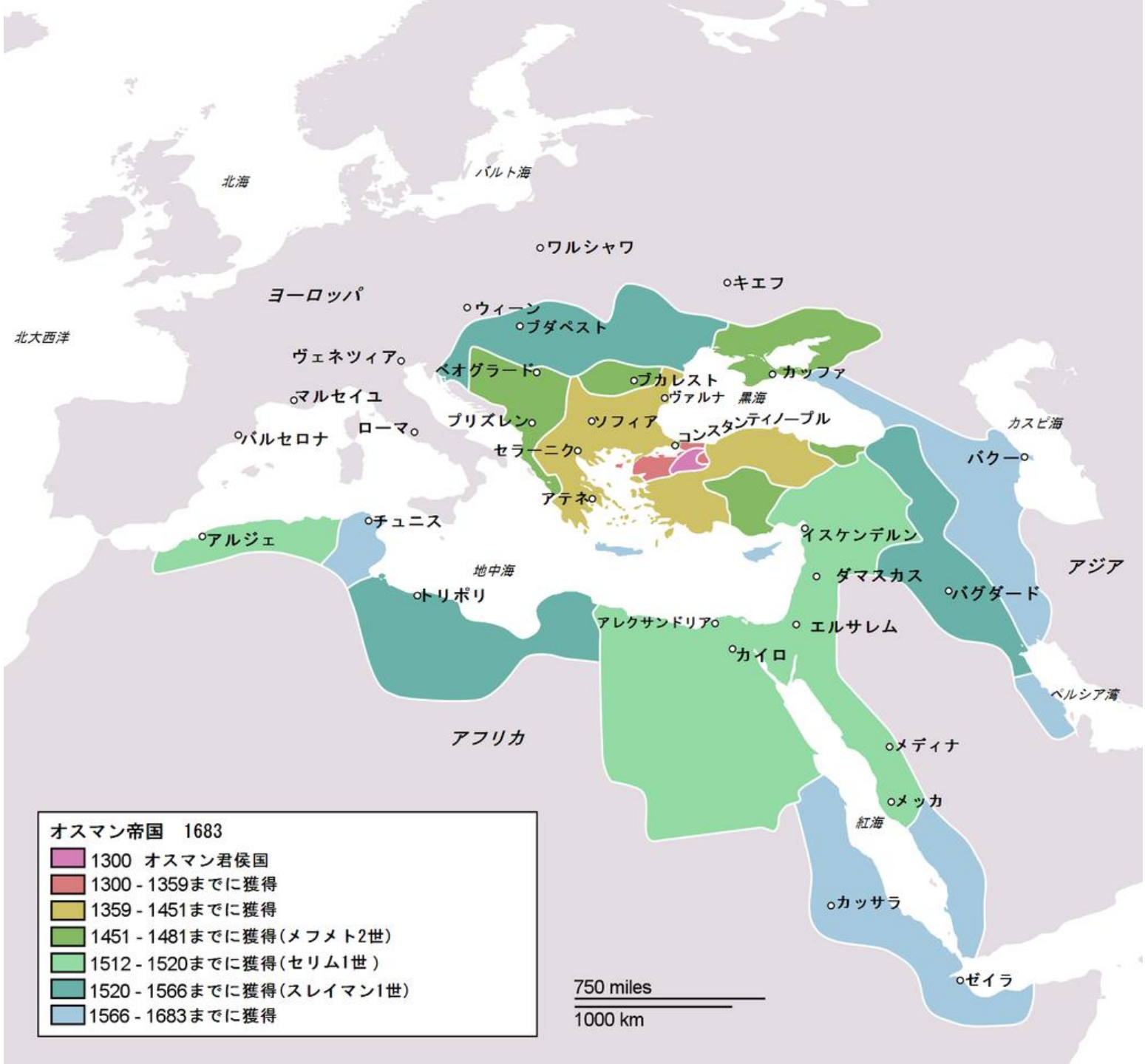
米軍撤退への経緯

- シリア内戦の中で、イスラム国が台頭。
- アメリカは、他の諸国と共に、イスラム国への戦いを開始。
- 最前線で直接、戦ってきたのは、クルド勢力
- クルド勢力の中に、トルコがテロリストだとみなす組織が存在
- トルコがシリア内のクルド勢力を一掃したい考え
- トランプ大統領は、複雑化する中東から自国軍を引き上げたい
- 政府内の保守派や国防省は、撤退したら同盟を傷つけると批判
- 今回、トルコのエルドアン大統領の説得にトランプ大統領が影響された格好。

戦後の国際法の再定義をするトルコ

- トルコが、シリア内の、ユーフラテス以東のトルコとの国境地域を「テロリスト集団を一掃し、そこに難民を安全に暮らせるように移送する」という安全地帯を提唱。
- 第二次世界大戦後の秩序の定義を覆す、新しい再定義。他国への侵略を正当化するもの。ドミノ現象が起こる危険。
- エルドアン大統領の目指すもの 「オスマン・トルコ帝国の復興」

オスマン帝国


北海
バルト海
ワルシャワ
キエフ
ヨーロッパ
ウィーン
ブダペスト
北大西洋
ヴェネツィア
ベオグラード
ブカレスト
カッファ
ヴァルナ
黒海
マルセイユ
ローマ
ブリズレン
ソフィア
コンスタンティノープル
カスピ海
バルセロナ
セラーニク
バクー
アテネ
チュニス
アルジェ
イスケンデルン
アジア
地中海
ダマスカス
バグダード
トリポリ
アレクサンドリア
エルサレム
カイロ
ペルシア湾
アフリカ
メディナ
メッカ
紅海
カッサラ
ゼイラ
750 miles
1000 km
オスマン帝国　1683
1300　オスマン君侯国
1300 - 1359までに獲得
1359 - 1451までに獲得
1451 - 1481までに獲得(メフメト2世)
1512 - 1520までに獲得(セリム1世)
1520 - 1566までに獲得(スレイマン1世)
1566 - 1683までに獲得

トルコとクルド人の確執

- 「国家なき中東の民族」約3千万人、トルコ、イラク、シリア、イランに別れて住む。トルコに最大人口。
- トルコ、クルド人の民族性を否定、独立を目指す組織がトルコ内に。
- シリア内戦で、クルドの自治独立が国境に接する、トルコ内でも自治独立のドミノが起こることを強く警戒。

三つ巴の支配に向かったシリア

- ユーフラテス川以東には、クルド人勢力が主体の自治機関が出来ていた。
- シリアのアサド政権から、距離を取っていた。
- 元々、オバマ政権の時から、アメリカはシリアへの影響力を失っていった。（化学兵器使用後も、軍事制裁せず）
- そのうちにロシアとイランがやって来て、ついに、シリア内戦の和平協定は、ロシア・イラン・トルコの三つ巴によって協議される

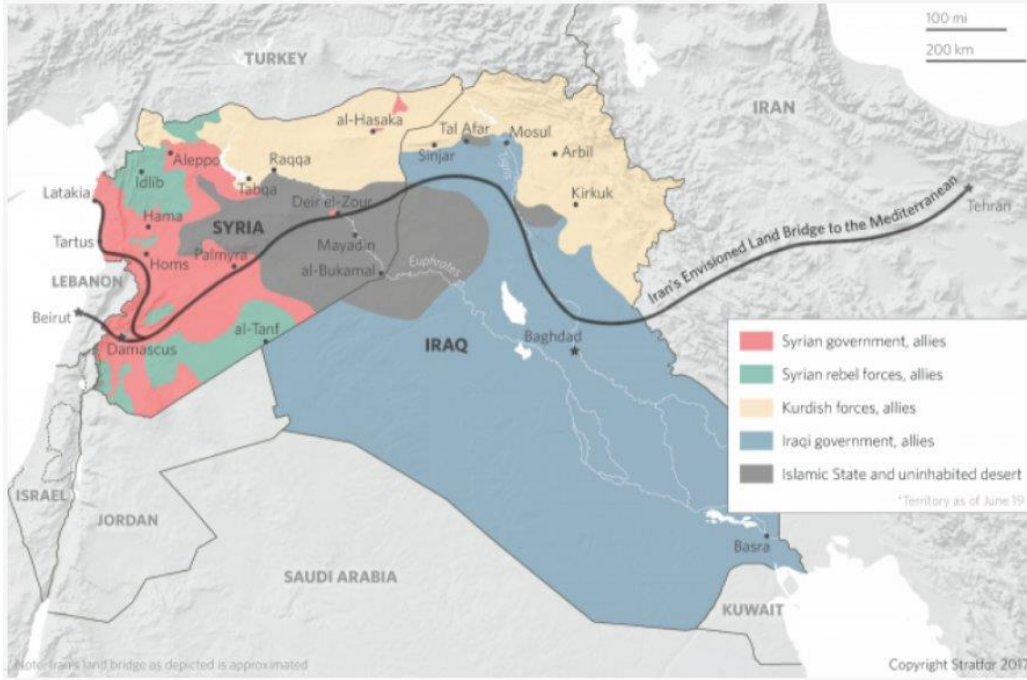
イスラム国の巻き返し

- アサド政権は、ロシア、イランの言いなり
- クルド人主体の自治政府機関が、唯一、アメリカを同盟国として、アサド政権をも牽制していた
- クルド人主体の民兵組織「シリア民主軍」が、イスラム国の兵士やその家族を捕虜としてした
- トルコ軍侵攻後、イスラム国が巻き返し、クルド人への攻撃をイスラム国支持者も加勢している。
- アメリカ、経済制裁、ペンス副大統領トルコ行くも、エルドアン大統領、動じず。

米国の空白を埋める、ロシア

- クルド人勢力は、シリアのアサド政権との連携を強いられる。
- シリア政府軍が、トルコ軍の侵攻を阻むべく前進。
- シリアのアサド政権は、ロシアの強い影響下にある。
- ロシア軍が、シリア政府軍とトルコ軍の間で監視。
- ロシアが、クルド勢力を自分の影響下に置く。

イランの地中海に至る巨大回廊



- これまでイランと、イラクにいるイラン勢力が分離されていた、ユーフラテス川以東の地域に、イランの勢力が一気に広がる。
- イランの勢力が、自国からイラクのメソポタミア地域、そしてユーフラテス川を越えて、アサド政権以西の地域、そしてレバノンへとつながり、地中海までのながる、巨大な「回廊」を確立できる。
- これこそが、イスラエル全滅を熱望している、イラン・イスラム政権の願っていたこと、イスラエルは、とてつもない危機にさらされる。

聖書に出てこないアメリカ

- 世界警察となっているアメリカが、なぜ聖書の中に登場しないのか？
- 主張「アメリカの勢力が弱くなる」
- ９・１１　信仰的遺産ではなく圧倒的な物量に頼れば、必ず弱くなる。
- ブッシュ大統領に対する、イラク戦争とその戦後処理に対するバッシング。その間に、イラクへの増派をブッシュ大統領が訴えていたのに、撤退を掲げたオバマ氏が大統領に選出。
- 不満を抱えていたスンニ派勢力の中からイスラム国が台頭。そしてシリア内戦。イスラム国がシリアとイラクにカリフを樹立目論む。

連続している、オバマとトランプ

- 引き下がろうとしていたオバマ大統領に、イスラム国に対する戦いという課題が強いられれる。
- シリアのアサド政権の冷血極まりない非人道ぶりに怒りを燃やしたと思いきや、化学兵器を一般民に使用したのに、約束した通りの軍事的制裁を行わない。
- これが決定的となり、米国の勢力はシリアの中で一気に弱まる。
- トランプ大統領は、保守派に囲まれ、また福音派にも囲まれ、これまでにない保守的政治。しかし、彼は公約の中で「シリアからの米軍撤退」を掲げていた。
- 実はあの９・１１以降、米国は、「戦争疲れ、中東疲れ」。オバマ氏とトランプ氏は正反対の考えを持っているようで、実は、「中東不干渉」ということでは一貫。

サウジの石油施設へのイランの攻撃

- トランプ政権、軍事的制裁、課さず。

中東諸国で「アメリカ抜きの外交関係」

- 「エジプトのイスラエル急接近」「サウジと湾岸諸国がイスラエル急接近」など、パレスチナを大義とする「イスラエル　対　アラブ」はなくなった。
- ヨルダンはパレスチナ人口を多く抱えるため表向き親イスラエルになれないが、長年、安全保障の連携をしている。
- 全てが「イラン」に脅威を持っているため、利害関係が一致。つまり、「アメリカ抜きの外交関係」を自主的に持ち始める。

イスラエルまでが、アメリカ抜きの外交

- 親米・同盟国であるサウジアラビアが攻撃されたのに、何ら手を打てない。
- 同盟国のクルド人を見捨てた。
- イランが迫って来る。
- 非難はするが、何らクルド人に援助しない中で、ネタニヤフ首相は、人道支援をすると申し出。

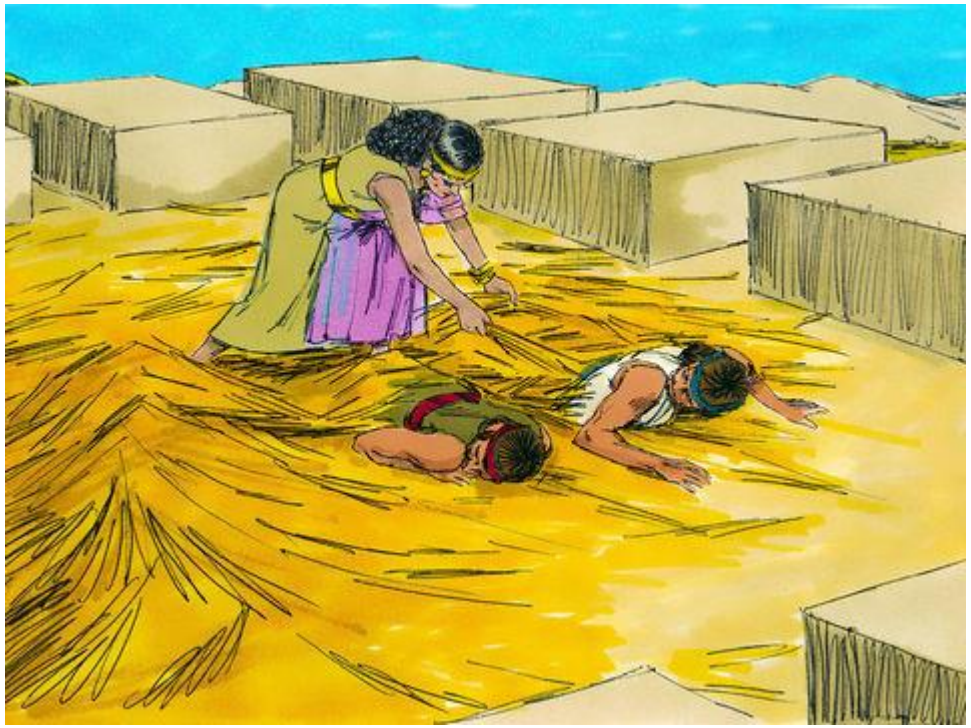
エゼキエル書38章　ゴグ・マゴグの戦い

イスラエルには分かる
クルド人の「味方は山だけ」

- 誰も助けてくれないということをよく知っているのはユダヤ人。他の国々とは違い、彼らの窮状に深く同情。
- 今でこそ、イスラエル以外にユダヤ人が最も多くいるアメリカだが、ホロコーストの時、難民を受け入れなかった。
- 自分しか味方はいない。
- 自分たちの味方になる人は、最高栄誉賞を受け、記憶されていく。
  - コーリー・テン・ブーム
  - 杉原千畝
- イスラエルの企業との付き合いは、利害を越えないと信頼されない。

イスラエルに手を伸ばす者たち

- エジプトの助産婦
- イスラエル人の間諜をかくまうラハブ
- 利害を越えて、一線を越えて救うところに、真実と愛がある。



利害のない愛

- 罪を犯した人類
- 罪人らのために身代わりの死

「ローマ5:8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」